

# 宗教的実践の課題

——大行の開く世界——

秦 治 人

浄土真宗の宗教的実践は、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と伝統された選択本願を一人一人の上に顕揚していくところにある。すなわち「念仏成仏是真宗」をひらいていった論家宗師の指讃するところを通して、弥陀の選択本願に直入し、仏道の課題に答えていくことである。念仏成仏の法が一切衆生の仏道の課題に応えうる

ときに、真宗は大乗の中の至極なりと言われうるのである。大行の問題はまさにここにある。

ところでここに言う実践とは単に行為という意味でなく、行為となって存在そのものを成り立たしめ、存在の間に答えるような行為のことである。それを宗教的実践と呼ぶのである。宗教の課題が実践そのものにおいて満足するよう

なもの、そこに大行といわれるものの視界があり、或いは他力易行といわれてくる理由がある。

いま特に『教行信証』『行巻』に依りながら、宗教的実践の問題を考えてみたい。

## 一

ところで「行巻」標挙には、「諸仏称名之願浄土真実之行」と示す。真实行は第十七願諸仏称名の願成就であり、それは諸仏の称揚讃嘆するところに証誠されているのである。しかしそのもとを尋ねれば如来の大悲の願心があり、その衆生救済の選択本願の意志の回向表現するときに、真实行は選択本願の行と言われねばならぬ。この選択本願の行の

一層具体的表現は衆生の宗教的行為、行である。ここに大行が「称無碍光如来名」と宣言されるについて、「斯の行は、即ち是れ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく」と言う。大行とは大悲の回向の行であり、そこに一切衆生を發見し一切衆生と共にあって涅槃たらしめんということがある。大行とは如来の表現である。それは如来が十方衆生に自己の一切を表現し、一切衆生の上に涅槃を満足させることである。それ故に如来の名を称する称名という一行をもつて真如一実の功德宝海を開示する。称名大行とは、私が名を称する口業である。しかしながら私が称えることによって自己に功德を満足させるのではなく、功德宝海が私に行となって回向され称名となるということである。そこに眞の満足があるということである。宗教的なものの姿は、このような回向をもつて表現されていくのである。宗教は回向のよつて立つ理と回向者の智、そしてその回向の向う対象をもつ。したがって宗教的实践は、その回向主体の智と、回向の内容と、そして対象とを通して行ぜられるのである。浄土真宗に於いて回向を言う場合も、回向の主体の違いはあつても回向そのものの本質は変わることはない。雑毒・雑修・虚仮・諂偽のみで真実心なき凡夫の存

在の本質は、既に「信巻」本願三心釈を以て明らかにせられている通りである。そこには

微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死海に漂没して真実の回向心なし、清淨の回向心なし（「信巻」）

と断言される。ここに、回向とは本来の意味においては如来に就くものであり、煩惱の衆生においては真実清淨の回向なしということが如来に言い当てられている。この如来の自覚が他力回向の働きに現するのである。それが本願の宗教によって示されるのである。回向とはひとえに如来の選択の願心とその行において言われねばならない。

かくして末代罪濁の衆生に明らかにされねばならない一点は、如来の選択の願心とその回向表現たる称名大行による仏道の成就ということである。大行に開かれてくる仏道、念仏成仏の法は、凡夫悪人をしてひとしく大乘至極の仏道に導く。この如来の他力回向によってのみ満足する仏道の世界、ここに他力真宗の正意があるのである。それゆえに衆生からは不回向之行と言われる。この自力回向の行と人間の自力的存在構造からは決して開かれることのないという仏道の断念は、凡夫としての存在の大地の自覚である。本願の宗教は、我れに回向なしと教え、ただ如来の回向に依れと勧めるのである。そしてこの道こそが大宝海を開き、

我れをして平等の大地に立たしめるのである。したがって南無阿弥陀仏の番号一つに満足する宗教的世界は、六字釈によって明らかにせられている如く、称名一つによって一切の宗教的満足を成就する世界のことである。選択本願の行によって念仏者は不退の位に至ることを確信する。すなわち、選択本願の願心聞きえたときに、報土の真因を決定する金剛心成就ということが行者の自覚に与えられる。称名に於いて極速円満し、その名号を開く聞名より開かれる大信海が金剛心の行者に歓喜せられる。称名には、如来の番号に開かれる自覚の世界が既に含まれているものと理解される。称名大行そのものが念仏者に全く新たな世界、本願海を開き大信海をうなづかしめるのである。大行とは本願の働きによる自覚の行であって、自力分別に支えられた倫理、道德の実践ということではない。念仏者がそのまま真信心の行者であり、それゆえに他力回向の行信によって、念仏者は大涅槃を超証するゆえに、真の仏弟子の名が与えられるのである。それは真の仏道を歩むという大涅槃の道が念仏者の足元に回向されているということである。念仏が不回向之行といわれるのも、如来より賜わる行が真の仏道ということである。釈迦諸仏と同じく仏道を成就する信念が念仏道において与えられる。それは凡夫の自力

回向の上にある仏道ではない。かくして、この仏道は、

明らかに知りぬ、これ凡聖自力之行にあらず。かるがゆえに不回向の行と名づくるなり。大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし（「行巻」）

と語られるのである。選択の大宝海とは、「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」とあるごとく、大行のよってある体である。大行は如来の選択の大宝海より形を現わし衆生に至り届いた仏道である。それゆえに大行とは称名として一切衆生に選択の大宝海を回向することをもって満足するのである。念仏成仏の道は、衆生の上に選択の功德大宝海が開信されるところに、自ずからうなづかれてくる。したがって、「聞と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。是を聞と曰うなり。信心と言うは、すなわち本願力回向の信心なり」（「信巻」）に示されるように、選択本願の行の表現である名号を称するところに、そのまま如来の選択の願心が行の上に映じている。それが本願力回向の信心が衆生の上に成就しているすがたである。

## 二

「行巻」冒頭に「謹んで往相回向を按ずるに大行あり、

大信あり」と述べられる。ここに選択本願の行信というものを大行と大信にわけ、まず大行としての仏道の伝統とその証明を、経・論・釈によって行なっている。すなわち名号讃嘆と名号の歴史を七祖諸宗の大師の上に明らかにする。しかし「行巻」全体の教相は大行の讃嘆とその伝統でありつつも、大信、すなわち「信巻」に展開される如来の選択本願の世界と信心成就の世界と全く別なものではない。大行は大信を映し出し、大信は大行によって導かれうなづかれてくるのである。ともに体は一つであり、行・信とその表現はことなっても、等しく如来の選択本願の世界、真如一実の大宝海を衆生に顕わし、念仏成仏の真宗を仏道として衆生の上に成就せしめるためのものである。一方は如来の選択回向の行を顕わし、他方は能選択の願心を顕わす。この大行大信が衆生に回向成就するところに願生の仏道が開顕されるのである。すなわち、衆生のうえに行信として感知せられる大悲の本願の歴史がそこに語られる。ところで大行・大信の大とは、「行巻」に引かれる龍樹の『十住毗婆沙論』の淨地品に窺うことが出来る。

深行<sup>ニ</sup>大悲<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>愍<sup>ニ</sup>念衆生<sup>ニ</sup>徹<sup>ニ</sup>入骨体<sup>ニ</sup>故名<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>仏道<sup>ニ</sup>故名<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>大慈心者常求<sup>ニ</sup>利事<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>穩衆生<sup>ニ</sup>慈有<sup>ニ</sup>三種<sup>ニ</sup>（「行巻」所引『十住毗婆沙論』）

如来の選択の眼が差別動乱する衆生の現実を凝視し、その選択の願心は、平等に大涅槃にあらしめんという「設我得仏……不取正覺」の誓願となる。そして我れと同じく仏地にあらしめたいという如来の回向心となって働く。それが大の意味であることが理解される。大悲の心は回向表現をもって具体化する。回向の魂こそが菩薩の作用であり、如来の成就である。

微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清淨の回向心なし。このゆえに如来、一切苦悩の衆生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向心を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに（「信巻」）

真実の回向心なき一切苦悩の衆生にとって、仏道としての行は、したがって当然、易にして勝でなければならぬ。ここに龍樹の説く信方便易行道ということも、宗祖においては、如来回向の仏道であるという領解がなされるのである。「行巻」に引かれる龍樹の諸文は、勿論称名大行の念仏易行道を表わすものに限られていないが、宗祖はこれらの文は「大經」の即得往生、住不退転という念仏による大乘菩薩道の問題を展開するものとして引用されるのである。

何故なら、信方便易行の念仏こそが必定の菩薩、不退転の大乗仏道を果す道であると道破されたからである。したがって、称名大行の念仏者の仏道は、そのまま正定聚不退の位に入り必定の菩薩に等しい者となる道であることが理解される。すなわち第一希行の行である南無阿弥陀仏を念ずることは、心に歓喜多き故に初地不退の位に定まるのである。『十住毗婆沙論』の入初地品、地相品、淨地品も、易行品に説かれる信方便易行をもつて見るならば、不退の位を得るといふ称名大行の世界をあらわすものとなる。それは、文相に執着せず文点を改めて、かえってそこに龍樹の眞の宗教心に触れるという宗祖の宗教精神の立場からの領解である。正しくここに、「人能く是の仏の仏量力功徳を念ずれば即の時に必定に入る」の文が示すごとく、本願の念仏の称名易行こそが眞の大行、仏道であると確信されるのである。

したがって、龍樹の易行ということは、行が修し易いということではなく、如来の本願力回向という本願名号に裏づけられた即時入必定の確信であり、その確信がある故に、名号は破闇満願の多歡喜となるのである。まさしく、易行道によって成仏道の位につき、それが仏道成就の信念を満足させる世界を与える。それに対して難行道とは、自力に

よる仏道であるから、常に墮二乗という難にさらされ、大乘仏道からの顛落の可能性を秘めており、仏道を必ずや成就するという、必定の確信が得られない不安と危険をはらんだ仏道である。それ故に歓喜を得ることは出来ないのである。信方便の易行においては、人間であることがもつ弱点に一切関わりなく本願他力に任持せられた仏道である故に、たとい地獄に墮することはあっても、本願の名号を聞くことによって畢竟、眞の仏道成就ということを覚悟するのである。本願念仏の行者こそがかえって地獄を恐れず、地獄をも我が世界とすることが出来るのである。それは本願力に由るが故に、地獄にあつてしかも地獄を仏道成就の場に転ぜしめる。龍樹の易行道ということも、かくして如来の本願力回向による仏道成就の大行をあらわすものにならない。大行とは地獄を荷負する眞の仏道であり、その地獄において平等の慈悲が果され、逆に墮地獄の身である衆生の自覚が、またその平等の慈悲を感じるのである。自己の内に地獄を見据えていることがかえって「我必ず当作仏すべし」という信念を与える。このような信念、すなわち聞名の一念に支えられた仏道は、名号を称するという大行の世界を表わすものである。

称とは聞名より必然的にうながされ、逆に称によってい

よいよ本願を聞くことが出来る。かくして、「それ名を聞くことと有る者は、すなわち不退転を得」と説かれる。龍樹の二道判を承けて説き出される曇鸞の『論註』の宗教的精神も、聞名他力易行の不行と、その聞名の一念に現生に正定聚不退に入ることの必然性を明らかにするところにあつたと言える。それはまた善導の領解から言えば「光触を蒙るものは心不退なり」(『往生礼讃』)ということである。

### 三

ところで、如来選択の行が、名号の聞信の一念に称名として我が口業に現行するとき、「能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう」(『行巻』)と言われるのはどのような意味であらうか。そしてまた「称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなわちこれ念仏なり、念仏はすなわちこれ南無阿弥陀仏なり」(同上)とは如何なること言うのか。それは如実に相応する念仏であることによつて、称名は一切の善惡の行を選択決判し、宗教という形をとるあらゆる迷妄を破していくということであらう。したがって「無明と果と業因とを滅せんための利剣は、すなわちこれ弥陀の号なり。一声称念するに、罪みな除こると」(『般舟讃』)と言われるように無明の迷妄を破

るのは利剣の名号であり、無明を破ったその底より極速円満する真如一実の功德宝海が顕われるのである。名号による批判の利剣によつて自己を徹する念仏の道は、やがて凡聖所修の雑修雑善を齊しく転成して功德となる誓願一仏乗を開くのである。

称名大行とは名号自身がもつ選択の願心に裏づけられた批判の行である。ここに久遠より已來の「凡聖所修の雑修・雑善の川水」「逆謗闡提・恒沙無明の海水」を転じて、「本願大悲智慧真実・恒沙万徳の大宝海水」となす世界が姿をあらわすのである。名号は如来回向の働きに依るがゆえに、我々の称名もそれに相応して、平等に逆謗闡提を撰取する本願海を感得させる。名号が開く世界とは、平等海である。逆謗闡提という人間に背くもの、仏道を破するものをも救うという宗教的世界を視界にもたらず。名号の世界の究極的世界とはこのようなものである。

真実の行、すなわち真実の宗教としての浄土の行は、かくして逆謗闡提をも包むものでなければならぬ。「行巻」の大行は、行の立場からこの課題に答えている。称名が大乗至極の真の大乗仏道を成就する正定業といわれる所以もここにある。善導の言葉で言えば

一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近

を問わず、念々に捨てざるをば、これを正定之業と名く。彼の仏願に順ずるが故に。(散善義)

と表わされる。この「順彼仏願故」の眼目が称名一行が眞の仏道を成就する行となることを確信させる。仏願は人間の機根の差別を問わない。ただ人間の分別や理智にもとづく回向の断念のところに仏願に順ずる行を賜わるのである。ここに念仏の行によって眞の仏道に身をおいたという信念が与えられるのである。それは同時に、称名が如来の眞実、すなわち名号という利剣を以て人間的知性の場を徹底して批判し破っていくことによって始めて称名が大行となることを明らかにしている。それは例えば、「行巻」所引の『論註』の三念門を釈する文を見れば、そこに「称字」を上欄外に示して

処陵反 知<sub>レ</sub>輕重也 說文曰銓也 是也等也 俗作<sub>二</sub>秤<sub>一</sub>  
云正<sub>二</sub>斤兩<sub>一</sub>也 昌孕反昌陵反

と転訓してあることから窺いうる。銓は量をはかることであり、是也は物の輕重を正すこと、等也は秤を掛けて、物を均等にすることである。斤兩を正すことである。したがってまず称名ということは名義に相応して称えられねばならないということである。また『一念多念文意』に

称は御なをとなふるとなり、また称ははかりといふこ

ころなり、はかりといふはもののほどをさだむることなり。名号を称すること、とこるひとこる、きくひと、うたがふこころ 一念もなければ、実報土へむまるとまふすこころなり

と言つてあるのも、如実相応が疑いなき信心の相によって決まるからである。その相応の吟味の働きをまた称というのである。この吟味によって称名は大行、すなわち眞実の行であるか否かを検証する。煩惱惡業の凡夫の口業を通して名号が現われる故に眞実の法そのものが自らを行じ自己を検証していく。凡夫惡人の上に行が念仏として眞実を証明していく。凡夫惡人は、そこに眞実が名告り眞実が現行する大地となるのである。

人間はこの法の現行することにおいて尊いのである。称名大行以外に人間が人間となる道はない。人間は本願名号の法に相応する称名を以て正業としていく。ここに称名正定業の生活がある。雑・助に簡んで称名正定業とする善導の立場は本願そのものに尋ねるところに可能となった。称名が正定業であることを判定する根拠は正しく「彼の仏願に順ずる」ところにあった。また法然によるならば、それは正しく本願選択の願心であるからである。その理由は『選択集』の二行章、本願章に述べられる通りである。

問云、何がゆえぞ五種の中に独称名念仏をもて、正定の業とするや。答云、かの仏の願に順ずるがゆへに、こゝろのいはく称名念仏はこれかの仏の本願の行也。

『選択集』

したがって「たとひ別して回向を用いざれども、自然に往生の業となる」(『選択集』)のである。正しく如来の本願選択の願心より選定されたのが称名であって、それ故に雑行を修する場合のような自力の回向はかえって如来の願心に相応しないのである。称名が不回向の行であるということは、如来の回向による以外に、煩惱の凡夫には救いの行がないことを明かすと同時に、更に積極的には、凡夫がそのような回向をもちいること自身が如来の願心に背き、自己にも背いていることを信知させるものである。如来回向の法を自力の虚偽雑毒の善行と平行化してはならないのである。如来回向の法である名号を、凡夫による回向、自力の行へと顛落させることは大乘仏道に於ける真の仏道からの顛落を意味する。末代罪濁の我等にとって真の仏道を成就する道は、本願力回向の念仏成仏道以外にない。唯一の凡夫の仏道は、専修念仏の行である。しかしまた時を失し、機に乖いているために行証を得ることの出来ない聖道の行者も、念仏成仏の門に帰するときに、真の仏道ここにあり

という確信を得ることが出来るのである。

かくして凡夫という人間の存在事実にかえったところのみ、名号と相応し、愚悪の凡夫という信知において「本願招喚の勅命」に相応するのである。聞は称であり勅命に応ずる帰命である。それは「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」というごとく、誓願不思議の名号を、勅命としてそこに帰命する。その一念において、正しく正定聚不退の大乗菩薩道に住する仏道の行に立つのである。帰命の一念に立つとき、必ず無上涅槃を証する大乘の究極課題を見開く。それは「涅槃の真因はただ信心をもつてす」という一念が既に仏道の課題、大涅槃を証すべきということを決定しているからである。本願の名号に相応する称名とは如来選択の願心を聞き疑心なきことである。それは本願力より回心された信心である。本願力回向の真信心は、金剛心であり、それ故に「横に五趣・八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲」と言われているのである。

称名はかくして単に実践的行というより、それは金剛心にまで貫通して、あらゆる難を突破し、現生に十種の益を



行じているところの真の仏道の世界に外ならない。選択本の願の称名念仏の行は、一切善惡の凡夫をして、諸仏と同じく大慈悲心にもよおされた大慈悲の仏道に立つ者として回転させる。

如来の回向に帰入して

願作仏心をうるひとは

自力の回向をすてはてて

利益有情はきわもなし

弥陀智願の広海に

凡夫善惡の心水も

帰入しぬればすなわちに

大悲心とぞ転ずなる『正像末和讃』

#### 四

一切諸仏の仏道というも、無上菩提心にうながされた大慈悲の行に外ならない。とすれば、本願の名号が凡夫をして利益有情の大慈悲心の行へと転成せしめていくということに念仏者は諸仏と等しく平等の慈悲を行ずる者となるのである。それゆえに凡夫をして諸仏と等しき者とする行として名号が諸仏に讃嘆される。ここに大行が諸仏称揚之

願、諸仏称名之願、諸仏咨嗟之願と言われる意味が領解されるのである。「称我名者」という願の意は、称名大行の仏道に依れ、ということであり、称名大行は、諸仏をして諸仏たらしめている行であると知れということである。

易行易修なる故に念仏に帰せよというのでなく、一切善惡・逆謗闡提なれども真の仏道の行者たらしめるものは念仏ひとつしかないが故に本願の念仏に帰せよ言うのである。正しく有縁の行とは名号ひとつである。我々が様々の仏道より自己の行を選択する以前に如来の選択回向の念仏の行がある。その行こそ、凡夫の為の真の仏道であることを本願は聞かしめるのである。如来の選択の行が如何にして凡夫に至りとどくか。それは選択の願心をひたすら聞くことに尽きるのである。しかし既に大行ありというその一点こそ、我々の抛り所であり、人間をして真に独立させ、命を尽しうる畢竟依となるものである。命について言う。

命字眉病反使也教也道也  
信也計也召也

これは草稿本「行巻」の『論註』三念門釈の帰命の命の字訓を欄外に記したものである。ところで天親菩薩の「願生偈」帰命尽十方無碍光如来の「帰命」は、五念門の中の礼拝門、尽十方無碍光如来は、讃嘆門である意を求め、特に、「帰命は即ち礼拝なりと、然るに礼拝は是恭敬にして

必ず帰命ならず」と言い、「帰命は重と為す、偈は己心を申ぶ」と釈される。我一心がひとえに他力の本願の名号に帰した自誓の詞であるところに、命には使、教、道、信、計、召の訓があることを示している。帰命には後の御自釈にある如く、善導大師に依って「言『南無者帰命』以下字訓を施して「命言業也招引也使也教也」と訓じ、かくして「帰命者本願招喚之勅命」であることが明らかにせられる。念仏の大道に帰して直に來れという本願の勅命、それが命である名号に帰命することは正業であり、他力のせしむる働きであり、本願の教えであり、眞の仏道であり、信心のおとずれであり、他力の自然の計らいである。すなわちそれは招喚によるのである。本願の教勅にかなうということである。称字は、先に述べた如く、「銓也、等也」また「俗作秤、云正斤兩」であり称には本願の勅命に相応すべく、はかるということが含まれている。はかるところに正しく相応し、等しくなり、恭敬ということも帰命となる。称とは信心の智慧の働きにまたねばならないことは言うまでもない。はかる規準は眞実なるものとその働きの由る。それは如來の眞心、したがって衆生のまことの信心である。本願は如來の無漏清淨の願心、その眞実心の働きの信心となつて稱えるのである。我々の口業に出ずる称でありながら、我々の

ものでなく、如來の智慧の計によるものである。

名号が称名となることによって、始めて大行が衆生の業の中で自己を表現し成就するのである。信心の智慧のハカリの作用によつて、称名がそのものと体を失わず衆生の上に行ぜられるのである。そこに

いかんが讃嘆する。いわく、かの如來の名を稱す。かの如來の光明智相のごとく、彼の名義の如く、実のごとく修行し相応せんと欲うがゆえに「信巻」所引『論註』と言われる。称名の背景に、既に如來の回向の名号があり、その名号を稱して來たれつと呼ぶ。名号讃嘆の心は回向の成就である。すなわち、「いかんが回向する。一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」(『行巻』所引『論註』)と言われるのである。衆生における回向成就の相が先の讃嘆のところであり、称名となつた大行である。大行とは超越的、形而上的に語られるべきものでなく、称名という衆生の行のうえに一人一人の上に現行するものとして理解されねばならない。様々な歴史的現実の差別の相を突破して、一人一人の上に表現されてくるものが大行の念仏である。虚仮不実の身の直中に身を切り破つて眞実が称名となつて名告り出る。称名なしに名号もなく、如來の

真実もない。絶対不二の機である一人の上に称名として自己の真実を光輝し証明する。ここに人間が輝く。男女貴賤、行住坐臥という一切の資格を簡ばず、時処諸縁を論ぜず証明される真実こそ、真実の宗教の名に値するものである。行こそその宗教の体である。その体が衆生に公開するものは「如来は即ち是れ真実なり」ということである。その真実は具体的には様々な行為、仮なる行、偽なる行を批判し、真の仏道・誓願一仏乗の世界を開いてくる。その世界が善惡淨穢を簡ばざる世界である。仮・偽なるものへの批判なくして真なるものを具体的に開くことは出来ない。

法然が如来の摂取の行について異訳『無量寿經』によりながら選択の行と領解し、それを取捨の義によって明らかにした如く、衆生の歴史的現実の中に身を置き、大衆を発見するところに、その本源の願を感得することが出来る。

法然は如来の選択の願心を歴史的現実の中に聞きとり、選択本願の行を専修念仏一つに定めることが出来たのである。それは如来の行の自己確認とも言うべきものであった。如来の願海は、既に差別動乱に生きる大衆の中に生命として静かに朽ちることなく流れているのである。

『選択集』に、「たとひ別して回向を用いざれども、自然に往生の業となる」と語られる。こう語る法然の思いの奥

底にあるものは如来の大悲心である。したがって回向を用いようにも用いることの出来ないのが人間の現実であるとすれば、この人間を擬視し救わんとするのをもまた如来ではないのか、とこのように法然は思念したに違いない。「斯の行は大悲の願より出でたり」といわれる如く、その大悲を注ぎ救う行は当然、造像起塔・智慧高才・多聞多見・持戒持律等の限られた者の為しうる回向の行ではない。貧窮困乏・愚鈍下智・小聞小見・破戒無戒の姿が凡夫大衆の現実である限り、このような現実に生きる者にこそ、仏道成就の行が成就しなければならない。「我於無量劫、不為大施主、普濟諸貧苦、誓不成正覺」(『大經』)、「心或不堪常行施、廣濟貧窮免諸苦、利益世間使安樂、不成救世之法王」(『如来會』)という如来の願意を尋ねるなら「弥陀如来、法蔵比丘之昔、被催平等慈悲、普為攝於一切、不以造像・起塔等諸行、為往生本願唯以称名念仏一行、為其本願也」(『選択集』聖全一九四五)ということが当然の如くうなづかれるのである。

法然はここに念仏一行を選び往生の本願としたまう理由を推求し、勝劣、難易の二義を以って一切をもれなく平等に救うことの出来る仏道、それが勝にして易なる念仏の行と直観したのである。すなわち、法然は念仏為本こそが如

来の願意であると確め、貧窮困乏の者と共にする仏道を自己の仏道の場合とした。そのような場こそ平等の慈悲の働く世界でなければならぬ。いつの時代も群萌は常に悪人と呼ばれる。極悪最下の人の為の極善最上の法、それが称名念仏一行である。この確信が本願から見開かれる。ひとの人間に対する係わり方は、群萌の中に身をおき、その具体的な係わりの中で自己を語り、本願の念仏を語るべきである。そのようにして称名念仏が、群萌一人ひとりの生命の叫びとなり、大地に喘ぐ人々の営みの中に仏道への地平を開いていく。それが正業と言われる。本願の念仏によって、誓願一仏乗の功德宝海としての浄土を賜わり、逆に地獄一定の煩惱の生活の上に、浄土を輝かす。その時、念仏成仏是真宗を証しする者としての尊貴の一人が誕生するのである。称無碍光如来名という大行にうなづかれてくる地平は、このように一方ではどこまでも、様々の苦悩の現実の彼方

に見開かれている平等の願海であり、他方では、地獄は一定という煩惱の事実を見据える大行の上に、真仮偽の信の批判によって正定聚不退の念仏者を確信させる。ここに、「真実功德とまふすは、名号なり、一実真如の妙理円満せるがゆへに、大宝海にたとえたまふなり。一実真如とまふすは、無上涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり。宝海とまふすは、よろずの衆生をきらはず、さわりなくへだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり」(『一念多念文意』)と述べられるごとく、証大涅槃を湛える名号の世界がある。

このようにして、大行と表現される称名念仏の宗教的実践は、弥陀の名号そのものに大乘至極の仏道を確信させながら、我々の存在の本源に一如宝海の世界を感得させるのである。